

ズクノ山第2遺跡F地区

県営畠地帯総合整備事業鹿村野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

2000

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成9年度から現在も実施中の県営畠地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成11年に実施したスクノ山第2遺跡F地区における調査結果の概要を報告するものである。

2. 本遺跡の現地調査及び室内調査は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業と文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会 教育長 堀 内 優

社会教育課長 水 谷 弘

社会教育課長補佐兼係長

4月～6月 川 口 博 文

7月～3月 岩 切 康 哲

埋蔵文化財担当 同主査 森 田 浩 史

同主任主事 金 丸 武 司

調査及び調査事務担当 同主査 森 田 浩 史（事務担当）

同主任主事 金 丸 武 司（調査担当）

3. 現地の作業員として、田野町内の方から多数の参加をいただいた。

4. 室内調査の実施にあたり、下記の方々の補助を得た。



5. 本書の執筆及び編集は金丸が行った。

6. 本書で用いた方位は磁北、海拔は絶対高である。

7. 本書の色調表示は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」を参考にした。

8. 本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

集石遺構 (S I) 土坑 (S C) ピット (S P)

9. 出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務局及び文化財収蔵庫に保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 層位	3
第3節 検出遺構	7
第4節 出土遺物	10

図版目次

第1図 町内主要遺跡分布図	2
第2図 調査区位置図	4
第3図 ズクノ山第2遺跡F地区土層柱状模式図	5
第4図 ズクノ山第2遺跡F地区検出遺構実測図(1)	8
第5図 ズクノ山第2遺跡F地区検出遺構実測図(2)	9
第6図 ズクノ山第2遺跡F地区出土石器実測図	11
第7図 ズクノ山第2遺跡F地区出土土器実測図	13
第8図 ズクノ山第2遺跡F地区出土石器実測図	15

写真目次

図版1 土坑検出状況	16
図版2 調査着手前遠景	17
図版3 時期不明ピット群検出状況	18
図版4 繩文時代早期礫群検出状況	18
図版5 集石遺構検出状況	19
図版6 旧石器時代遺物出土状況	19
図版7 S I - 05検出状況	20
図版8 S I - 05内敷石検出状況	20
図版9 S C - 01検出状況	21
図版10 S C - 02検出状況	21
図版11 大形土坑検出状況	22
図版12 大形土坑土層堆積状況	22
図版13 調査区完掘状況(b区)	23
図版14 調査区完掘状況(c区)	23
図版15 出土遺物(旧石器時代の石器)	24
図版16 出土遺物(縄文時代の土器1)	25
図版17 出土遺物(縄文時代の土器2)	26
図版18 出土遺物(縄文時代の土器3)	26

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、周囲を取り囲む鰐塚山系をはじめとする山地及びその麓に形成された扇状地や河岸段丘などからなり、1市（宮崎市）と5町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷村）と接している。これまでの主産業は、大根や葉煙草などの農業に依存していたが、近年は工業団地の整備や専門学校の誘致、宅地開発などにより、次第に変化・発展しつつある。しかしその一方では農業基盤整備や各種の開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となっており、町教育委員会でも調整や調査体制の整備、充実を図ってきた。しかし、これらを含めた開発事業との調整は困難を極め、遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅しているのが現状である。

平成11年度は県営畠地総合整備事業鹿村野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布を確認するため試掘調査を行ったところ、部分的に縄文時代早期の遺構、遺物が分布することが明らかになった。平成11年6月5日に中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議を行い、設計施工上やむを得ず消滅を免れない部分について発掘調査にやる記録保存を実施することとなり、平成11年6月18日付けで委託契約を締結、同年8月17日から現地の調査に着手した。調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら同年12月23日に終了した。同遺跡の調査面積は約8,200m²に至った。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

鹿村野地区は田野町の中心部から北北東へ約5km、宮崎市との町境に流れる黒北川と、清武町の町境に流れる清武川に挟まれ反孤立化した標高約95~110mの台地である。周辺には前年度以前に調査が行われたズクノ山第2遺跡A~E地区が立地している。

このうちA~C地区からは、縄文早期の層から確認された遺構や遺物は貧弱なものであったが、アカホヤ火山灰層上層より縄文時代後期初頭と思われる土器が出土したほか、時期不明ながら多数の柱穴が確認された。

D地区からは、早期包含層からの出土は僅かであったものの、検出されたピットより、横位の山形押型文と撫糸文を併用した土器が出土し、当該期の宮崎県央部における土器文様の一形態を表す資料として注目された。

E地区からは、アカホヤ火山灰層直下より、計6基の長方形の土坑列が確認された。また、早期ローム層下部からは64基の集石遺構が検出され、縄文時代早期前葉と思われる貝殻条痕土器が多数出土した。

他にもこの台地には、前年度調査の行われた、前平式や平格式が多く出土した前ノ原第2遺跡が立地しているほか、川を隔てた北側の対岸には旧石器時代~縄文時代草創期、早期の遺跡として広く知られる椎屋形第1、第2遺跡、また、その東側には船引地区遺跡も立地するなど、縄文時代早期を中心として、貴重な成果が多数報告されている地点もある。



第1図 町内遺跡分布図 (1 : 50,000)

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査の概要

ズクノ山第2遺跡F地区は平坦面の多い鹿村野地区台地上の北部に位置し、周辺でもひときわ高くなる丘陵地に位置する。調査前は畠地と荒れ地によって構成されていたが、耕作土及びアカホヤ火山灰層を除去した時点で、頂上部をほぼ完全に喪失しているほか、調査地内も部分的に削平されていたが、北側の斜面は耕作による削平を殆ど受けおらず、良好な残存状況であった。

本遺跡の調査にあたっては、前段階で実施された試掘調査のデータに基づいて、縄文時代早期の遺構、遺物が出土することを想定した。

調査は表土に次いでアカホヤ火山灰層の堆積部も機械による掘削を行った後、手堀による遺物包含層並びに遺構検出作業を行った。また、e区においては表上層である搅乱層の下部は既に縄文時代早期の生活面が削平されていたが、旧石器時代遺物出土の可能性を考え下層の調査を行ったところ、IH石器時代の遺物の出土が少量ながら確認された。

第2節 層位

層序は以下の通りである。なお、調査区ごとの堆積状況は図3のとおりである。また本遺跡は、丘陵地である上に凹凸が激しく、更に後世の開墾や整地により、堆積状況は調査区内でもかなりの差異が認められたことを付け加えておく。

第I層：耕作による搅乱層（10YR 3/1）

粒子が粗く、さらさらしている。II、III層の堆積のみられないところでは、IV、V層のブロックが混入する。丘陵頂部からの土砂により形成され、層中には縄文時代早期をはじめとして縄文時代後期、弥生時代の土器や、近、現代の陶磁器が少量含まれる。

第II層：整地による搅乱層（10YR 2/1）

丘陵の斜面を整地する目的で丘陵頂部より運ばれた層である。I層以上に粒子が粗く、小礫が多く含まれる。他に、肥料として混入されたのか、灰も少量確認された。また、I層と同じくこの層でも遺物が採集されている。

第III層：黒色土層（10YR 2/1）

整地する際に殆どが削平を受け、ごく一部のみ確認された。I、II層とは色調は類似するものの、粒子が細かい他に、堅く結まっている。砂利等の混入物は含まれない。

遺物は確認されなかったが、この層を削平し形成したI、II層において縄文時代早期以降の遺物が確認されていることから、この層の堆積した時期に、丘陵部において遺跡が形成された可能性が窺える。

第IVa層：アカホヤ火山灰層（10YR 7/6）

火山ガラスを多量に含んだオレンジ色の層である。層は軟質であり、水分、粘性とも殆どない。若干III層の色調が混入し、土質に反映されていることから、二次堆積層であると考えられる。



第2図 ズクノ山第2遺跡周辺地形図（1：1,000）

第IV b層：アカホヤ火山灰層（10Y R 8 / 6）

火山ガラスを多量に含んだオレンジ色の層である。IV b層のような他層の混入は見られず、極めてプライマリーな状態である。層中には、多量に認められる火山ガラス以外に、僅かではあるが黒色の粒子が含まれる。また、層最下部には白色の粒子及び、オレンジ色の粒子が堆積している。

第V層：黒色ローム層（10Y R 3 / 2）

極めて堅く縮まった層。俗に言う“牛の脛ローム”にあたると考えられる。層中には白色の粒子が多量に認められる他、オレンジ色の軟質粒子も中量混入している。層は水分、粘性ともに殆ど見られず、風化するとひび割れが顕著である。この層からは、d区において集石遺構が1基検出されたほか、多量の遺物が出土した。

第VI層：暗褐色ローム層（10Y R 3 / 3）

堅く縮まった層。層中には、V層からの白色粒子が中量含まれ、他にガラス質の粒子と直方体の黒色粒子をそれぞれ少量混入している。この層はやや湿っており、粘性に富む。層下部の断面はまだら状になる。この層からも遺物は多量に出土したが、それは層上部までである。本遺跡で検出された集石遺構の検出面も層上面にあたり、この面が当時の生活面であったことを窺わせる。

第VII a層：褐色ローム層（7, 5 Y R 4 / 4）

V層ほどではないにしろ、VI層よりも堅く縮まっている。断面はまだら状である。層は、白色粒を多量、ガラス質粒子を中量、オレンジ色の軟質粒子を少量、直方体の黒色粒子を微量混入する。粘性に富む。

第VII b層：小林降下軽石層（7, 5 Y R 4 / 4）

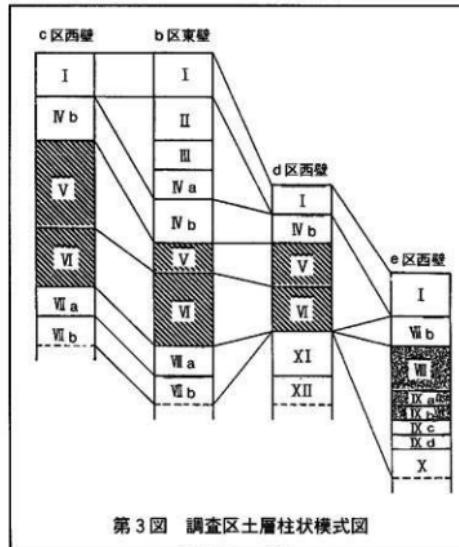
非常に堅く縮まったく層。やや湿っており、粘性はなし。層中には、オレンジ色の軟質粒子が多量、ガラス質粒子が中量、黒色粒子が少量見られる。

第VIII層：褐色ローム層（10Y R 4 / 4）

堅く縮まったく層。断面はややまだら状の堆積状況であり、層中には火山ガラスが少量含まれる。層はやや湿り、粘性に富んでいる。この層からIX b層にかけて、旧石器時代と考えられる遺物が出土した。

第IX a層：黄褐色ローム層（10Y R 5 / 6）

上層や下層に比べ、遙かに軟質の層である。断面はまだら状になり、それは層下部ほど顕著である。この層には火山ガラスが多く含まれるほか、白色粒も少量



第3図 調査区土層柱状模式図

ながら認められる。このIX層はローム層とAT層の漸移層である。E区は丘陵の崖面直下にあたるため、丘陵頂部のAT層が流入した結果、このように多くの漸移層が形成されたものと考えられる。

第IX b層：褐色ローム層（10YR 4/4）

水分をやや含むが、粘性は殆どない。層中には白色粒子が多量に含まれるほか、直方体の黒色粒子が僅かに含まれるが、特徴的なのは火山ガラスであり、極めて多量に混入する。層は堅く締まっており、まだらの強い層である。断面はまだら状の斑紋が顕著である。

第IX c層：明黄褐色ローム層（10YR 6/6）

層中には大小さまざまな軽石片が混入するほか、火山ガラスは大量に認められる。また極めて軟質であり、粒子は粗く、粘性は皆無に等しい。こうした特徴は、IX a層、IX b層に比べ、X層の影響が強いためと考えられる。断面はややまだら状である。

第IX d層：明黄褐色ローム層（2, 5Y 7/6）

IX c層よりも更に軟質であり、色調が黄色味がかった層である。層中には大小の軽石片が多く混入しており、火山ガラスも極めて多量に認められる。層は湿っているものの、粘性は全くない。上層からのつながりか、微かにまだら状である。

第X層：姶良丹沢火山灰（シラス）層（2, 5Y 7/4）

プライマリーなAT層である。水分を多く含むものの、粘性は全くない。層中には大小の軽石片が混入するものの、IX c層、IX d層ほどではない。火山ガラスは極めて多量の混入を示す。まだら状の斑紋は、この層では全く見あたらない。風化すると白色に変色し、砂状の土質となる。

第XI層：礫層

拳大から親指大の礫が堆積する層。礫と礫の隙間は、軟質の砂利を含んだ粘土層が混入する。構成する礫は、砂岩とチャートが多い。このうちチャートは節理面が多く、石器製作には向かないものばかりであるが、調査区から出土した石器の中には、これに酷似したチャートを用いた石器も多く、それらはこの礫層から採取したことが考えられる。

第XII層：宮崎層群

宮崎平野の基盤をなす層である。青灰色を主とした砂岩や粘板岩がて何メートルにもわたって厚く堆積しており、上部は風化のためか幾分軟質であるが、下部に至ってはかなり硬質である。

第3節 検出遺構

全地区併せて縄文時代早期の疊群が2基検出されたほか、集石遺構と土坑は合計して50基近くにのぼった。ほかにc区では、時期不明ながらピット群を検出した。

疊群はa区とb区にそれぞれ1基ずつ検出された。特にB区における疊群はきわめて大形であり、調査区の大部分を覆うような状態であった。土坑や集石遺構は、疊群と同様にc-a区へと傾斜する斜面上に局的に集中して検出された。これらは疊群の形成された時期とほぼ同時期のものであると考えられ、土坑の中には疊群から流れ込んだと思われる疊が多層に入り込んだものもあり、集石遺構との分別は困難である。

土坑（第4図SC-01, 02）

長円形の土坑である。どちらも疊が多く入り込んでいるが、集石遺構と比べてまばらであり、また床面近くは少量しか出土しなかったため、土坑として認識した。また、この2基は、傾斜面に直交する形で隣接して検出された。

このうち（SC-01）は、標高の高い方からは深く、低い方からは浅くスロープ状に掘り込んでおり、最も落ち込む地点は中心よりやや標高の高い側に設定している。横断面はU字状を呈する。（SC-02）は（SC-01）よりも長く全体的に深めであるが、尖端部と末端部が特に深くなっている。つなぎの部分は階段状にやや傾斜する。

（SC-02）の傍らには、疊が集積されているが、目的は判然としない。また、この覆土中から、斜位の山形押型文土器や、桑ノ丸式土器の一種と思われる土器が出土した。なお、（SC-01, SC-02）共、土坑の覆土から多量の炭が確認されている。この2基については、連結土坑との関連性も考えられる。

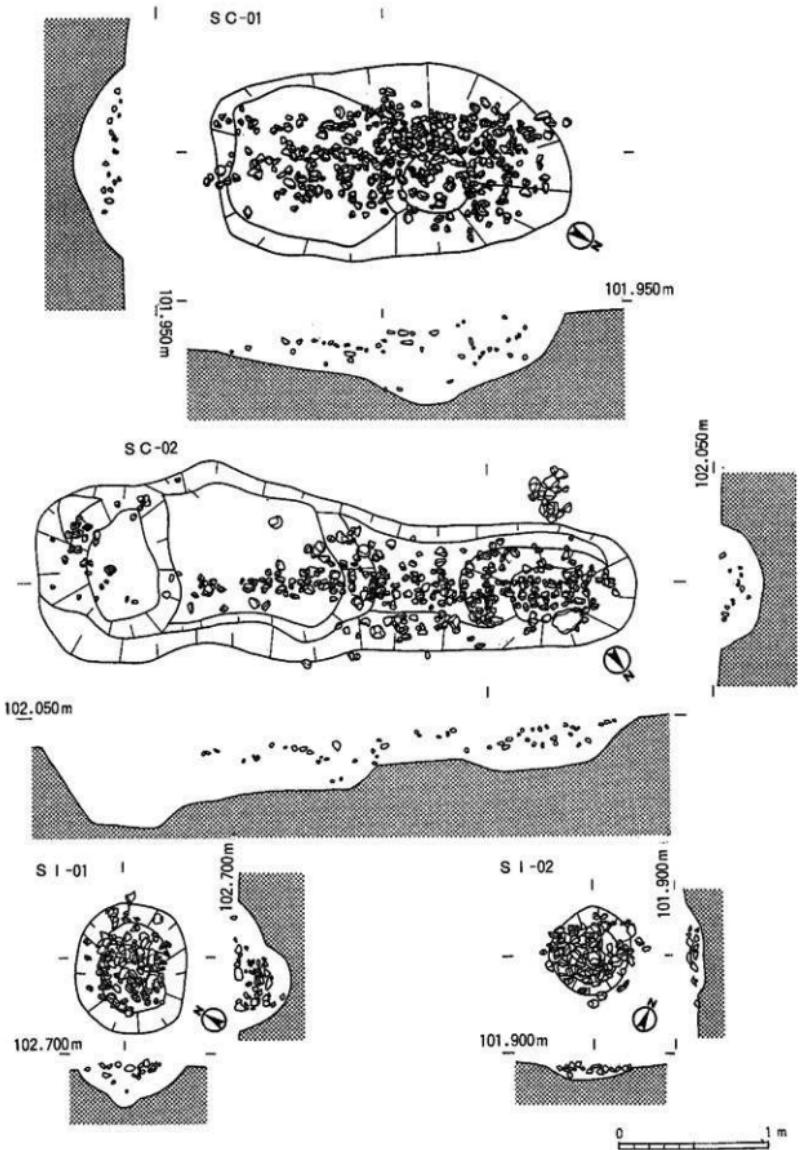
集石遺構（第4図SI-01～第5図SI-06）

（SI-01～06）は集石遺構である。（SI-01, 02）は規模や用いる疊に大差はないものの、（SI-01）は掘り込みが深いのに対し、（SI-02）は浅めである。ただし、どちらも敷石を持つない点は同じである。

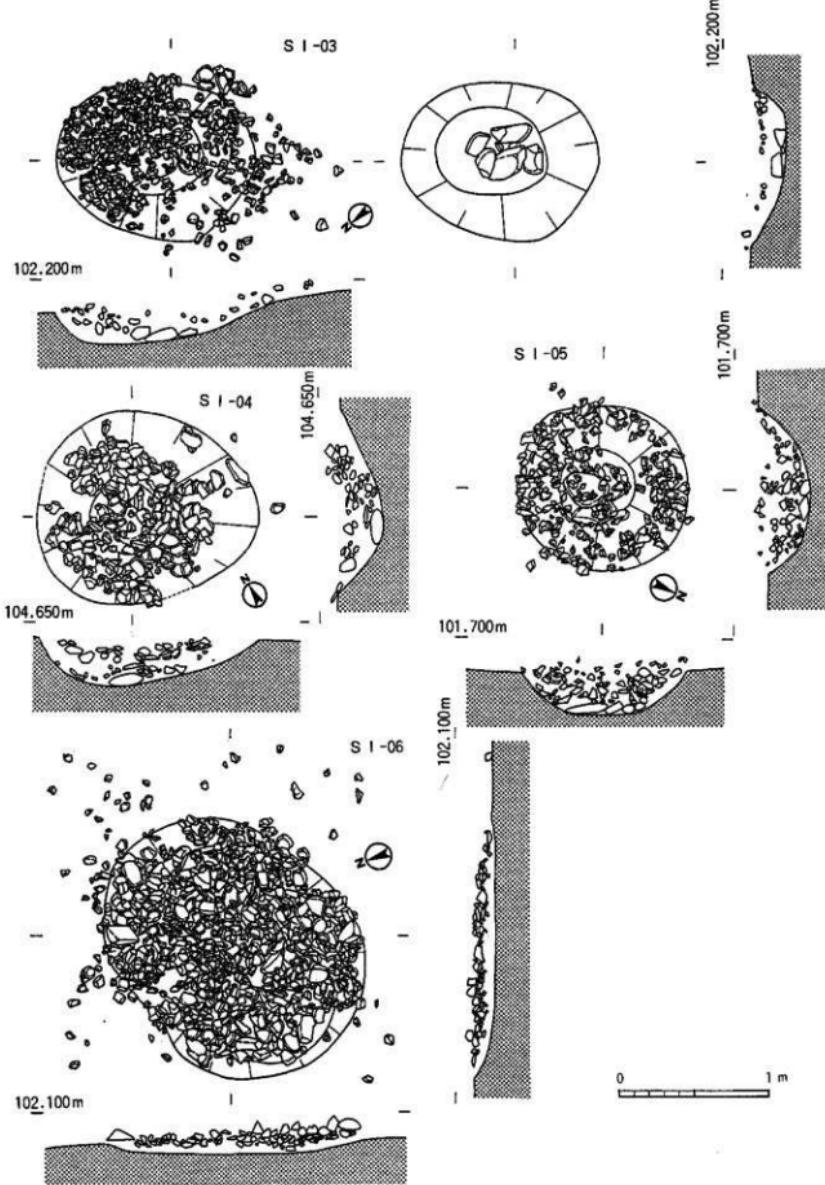
（SI-03～05）は敷石を持つものである。平面形は長円形からやや楕円形を呈し、大きさもほぼ同じである。これらは掘り込みが深いものが多く、掘り込み中に疊が密集する点も共通している。敷石は1～5個程度であり、主に砂岩製の、扁平な円疊が使用される。また、覆土中には炭が多く見られ、特に（SI-05）からは、植物の種子らしきものも検出された。

（SI-06）は、大型の集石遺構である。ほかの集石遺構と違い大小の疊を用いており、全体的に円疊の占める割合が高い。また、この遺構は、掘り込みが大変浅く、敷石を全く持たないことも特徴である。この遺構はD区にて1基のみ検出されたものであり、遺構内及びその周囲から出土した土器より、構築された時期は縄文時代早期の中でも後半にあたると思われる。

集石遺構は、そのほぼ全てが掘り込み持つものであったが、分類すると掘り込みの深さや大きさ、あるいは敷石の有無などの属性において、いくつかのタイプ分けが可能である。また、疊のまばらな遺構も多く検出されたが、こうのような遺構に関する詳細な検討は、今後の室内整理作業や報告書作成作業の中で明確にしていきたい。



第4図 検出構造実測図(1)



第5図 検出構造実測図(2)

第4節 出土遺物

本遺跡からはE区において、旧石器時代の石器群が確認されたほか、縄文時代早期の遺物は調査区全域において出土した。また、d区やe区の擾乱層からは、縄文時代中期から後期初頭の遺物も出土している。

旧石器時代の遺物（第6図1～11）

旧石器時代遺物が確認されたe区は、かつての土取りにより小林降下軽石層上面まで削平されていた。この地点は以前断面採集によりX層直上面において石器が採集されていたため調査を行ったところ、旧石器時代の遺物が確認された。また、その上部の擾乱層からも、少量の遺物が採集されている。なお、1点ではあるが、c区からも旧石器時代と思われる石器が出土した。

(1)は、疎面付近の肉厚な剝片のバルブをカットした後に末端部に刃部調整を行ったスクレイバーである。刃部は鋸歯状になっているが、剝離の規模は一定でない。

(2)は、不定方向から剝離を行った石核より作出された厚手の剝片の片側縁に剝離を行ったものである。この剝離は小規模で意図を窺わせるため、これを刃部調整と考えスクレイバーとしたが、刃部角や剝離が一定しておらず、機能的に優れていたとは言い難い。

(3)は、二次加工剝片である。不定方向から剝離された石核より生じた剝片の一端に調整を加えたものである。剝離が樋状になっているため、彫器の可能性も考えられる。

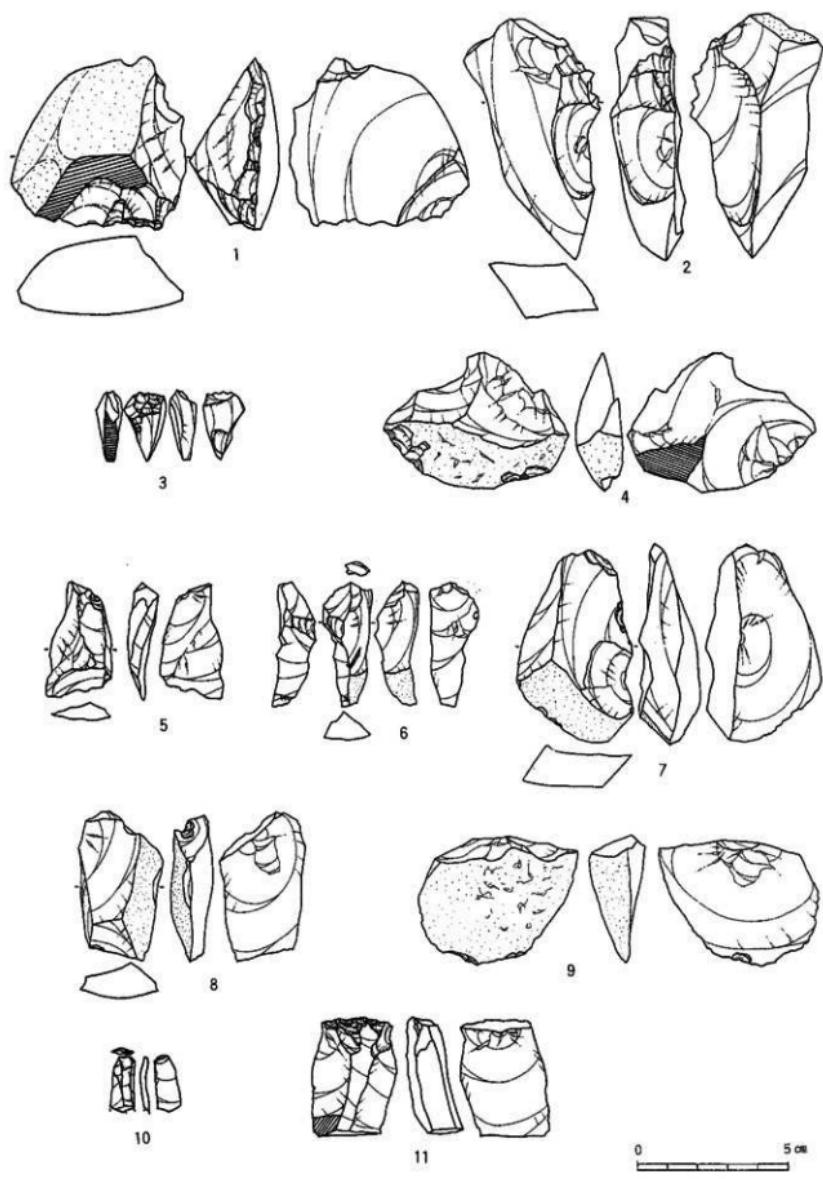
(4～9)は剝片である。このうち(4)の表面には、まず下面から剝離が行われたのち、上面からの剝離を連続的に行い、(9)は疎面除去と思われる剝離を一定方向から行ったのち、打面を転移し剝離しているため、この2点からは剝片剝離に対する意図が窺えるが、(5), (6)の剝離面からは、そういうものは殆ど見受けられない。

なお、(7)には、打面と底面が明確に設定され、横長剝片を連続的に剝離しようとする方向性が明確に感じられる。

これらE区からは、Ⅸ層からⅨb層にわたって遺物の出土が確認されたが、Ⅸa～d層はシラス層が丘陵頂部からe区へ向けて流れ込んだことによって形成されており、殆どが同一母岩でもあるため、これらの出土遺物の間には大きな時間差は無かったとも考えられる。

(10)は、E区の上部擾乱層下面より出土した細石刃である。表面には縦長の剝離を何度も行った痕跡が認められ、連続的な細石刃剝離作業が行われたことを示している。下部は折損しているが、これはいつ頃行われたものか判別しがたい。チャート製である。

(11)は、C区の縄文早期遺物包含層より出土したものである。表裏面の打点が一定していることや、石材が特殊であることから、旧石器時代のものと判断した。縦長剝片剝離が行われた結果剝離されたものであり、上部には頭部調整が密に行われる。



第6図 出土石器実測図

縄文時代の遺物

土器（第7図12-28）

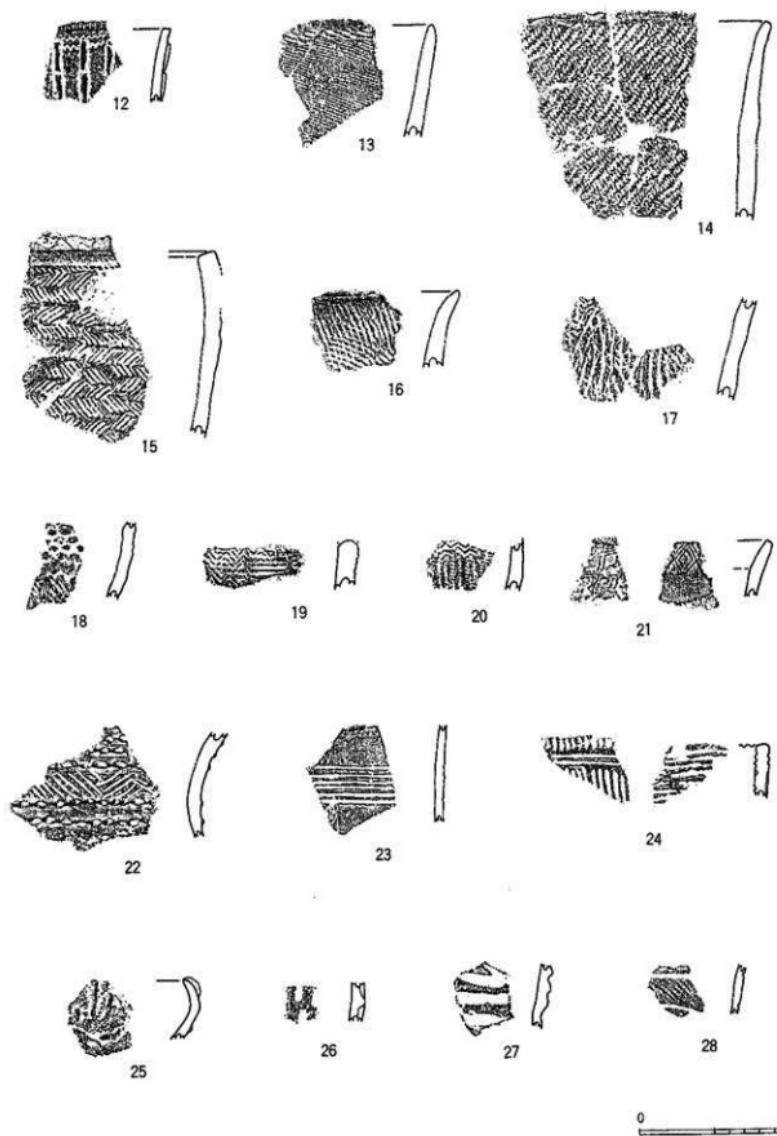
本遺跡からは、縄文時代早期を主体として多量の土器が出土した。

(12-24)は、縄文時代早期の土器にあたる。(12)の口縁部には、2列の貝殻腹縁刺突を行ったのち、横状の突帯を貼り付ける。広義の前平式土器に属すると思われる。(13)は斜位の貝殻条痕文を行い、口縁部直下に貝殻腹縁刺突を行う。これは、昨年度、E地区の調査において多量に出土した土器と同類のものである。(14)は全面に縄文の施文された土器である。口縁はやや外反し、内面は横位のナデによる調整が行われる。(15)は桑ノ丸式土器である。外面には羽状の短沈線が密に施文されている。口縁部はやや内湾し、断面は方形である。(16)は撫糸文系の土器である。口縁部は外反する。また、内面の上部は、撫糸が施文されたのちにナデ消されている。(17)は、撫糸文と山形押型文が併用された土器である。これは昨年度、D地区の調査でも出土したものであるが、これはその資料と同一個体である可能性が高い。(18)は、梢円押型文と撫糸文が併用されたものである。

(19)は山形押型文を施文したのちに、横位の条痕文を施文したものであり、器壁は厚い。(20)は、山形押型文と縄文の併用である。このように、押型文土器と他種の文様が併用された土器のバリエーションが大変豊富であることは、本遺跡の特徴といえる。(21)は、内外面及び口唇部に菱形の押型文を施文している。外面は外反気味である。器形や文様から、手向山式土器と考えられる。

(22)は平柄式土器である。細く刻み目のある突帯が、沈線を挟んで3~4条貼り付けられる。胎土には、金色に変色した雲母が多く認められる。平柄式の中でも、天道ヶ尾式土器若しくはその関連性の強い一群であると思われる。遺跡内の平柄式土器は、このほかに妙見式も出土している。(23)は塞ノ神式土器である。撫糸を縦位に施文したのちに沈線を施していることや、器壁がかなり薄手であることから、塞ノ神式土器の中でも柄ノ原タイプと呼ばれる一群である。塞ノ神式土器は、このほかに貝殻腹縁刺突が多用されたものも確認された。

(24-28)は、縄文時代早期以降の土器である。これらは全て、遺跡中の擾乱層にて採集されたものである。(24)は、縄文時代前期後半に編年される曾畠式土器である。(25)は頭部で大きく外反し、口縁部で内湾するものである。口縁部には突帯が貼り付けられ、外面には縄文が行われている。器壁は薄く、胎土には石英が多く含まれる。こうした特徴は、縄文時代中期に瀬戸内地方で盛行した船元式に見られるものに類似しており、この時期の瀬戸内地方との結びつきを想起させる資料といえる。(26, 27)は凹線文が施文される一群である。(26)には、この種の土器に頻繁に用いられる口縁部直下の連点文が施文されるほか、(27)には凹線による施文が行われる。これらの土器は、中期末~後期初頭に、南九州の内陸部において盛行する土器群である。(28)は、1点のみ検出した、後期初頭の中津式土器である。これは、二本間沈線を縄文によって充填しているもので、縄文は細かく、施文後にナデ消し等の手法は用いられない。また、薄手で焼成は良好である。このように凹線文系の土器と、磨消縄文系の土器が、同一遺跡より出土した例はごく稀であり、当時の二系統の土器間の相関を考察する上で貴重な資料といえる。



第7図 出土土器実測図

石器（第8図29～41）

石鎌、尖頭状石器、スクレイバー、石錐、石斧等が出土した。

本遺跡の丘陵部中からは、疊層の露頭も含まれるが、その中には良質なものは少ないので、チャートの原礫を難なく見つけることができる。遺跡を形成した縄文早期においても、この露頭から石材を採取したことが予想され、遺跡内に残される石材の中で、チャートは粗悪なものが多い一方で出土率は高い。

(1, 2) は石鎌である。(1)は抉りが深く、(2)は浅い方に分類される。刃部である外側はどちらも鋸歯状に仕上げている。

本遺跡で出土した石鎌は、昨年度調査を行ったズクノ山第2遺跡E地区と比較すると、全体的にやや大ぶりである。また、石材はチャートが殆どを占め、一部黒曜石製の出土も見られたが、流紋岩やホルンフェルス、サヌカイトが極めて少ないことも特徴である。また、1点のみではあるが、水晶製の石鎌も確認された。

(3～5) は尖頭状石器である。縄文早期押型文土器との共伴例が多い遺物として知られている。

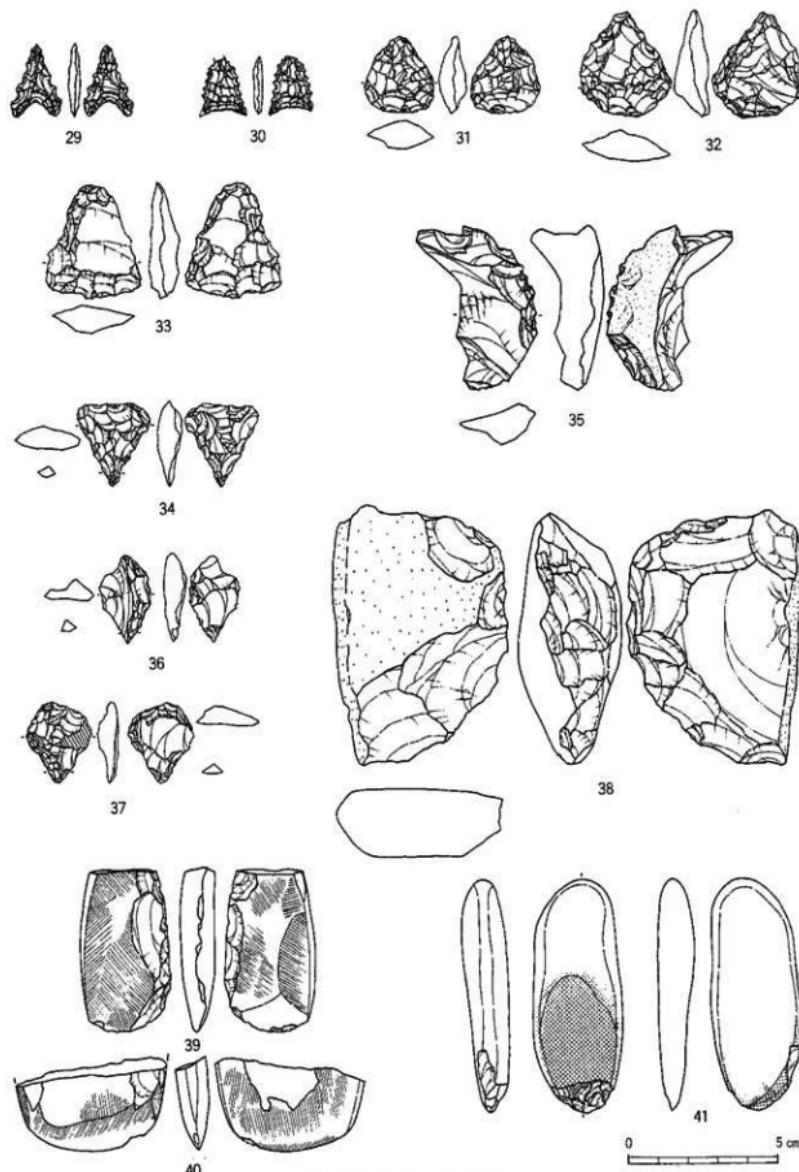
(4, 5) は、まず面的な調整を行ったのちに小規模の剥離を行い成形を行う。一方、(6)は元が薄手であるためか、面的な調整を行う工程は省略され、縁辺部を加工するに留めている。また、成形する際、形状を尖頭状にするため調整した意図が明確に窺える。尖頭状石器はこのほかにも多量に出土しており、出土が僅かであったE地区とは対照的である。

(7～9) は石錐である。形状はやや尖頭状石器に類似するが、尖端部の断面形を調整する剥離が見られる点で石錐とした。このうち(7, 9)は面的な剥離を施していることから、はじめからないし尖頭状石器を製作する途中で石錐としたものと考えられるが、(8)は剥片剥離の際に偶発的に生じた尖端部を調整するのみに留めており、石器製作上の柔軟性が窺える。

(10, 11) はスクレイバーである。(10)は流紋岩の剥片の一端に、刃部が弧状になるよう調整を行った、縄文早期に出土数の多い形態のものである。(11)はE区擾乱層からの表面採集によるものである。砂岩製であり、刃部は粗いものの連続した調整が行われている。おそらく縄文早期以降のものと思われる。

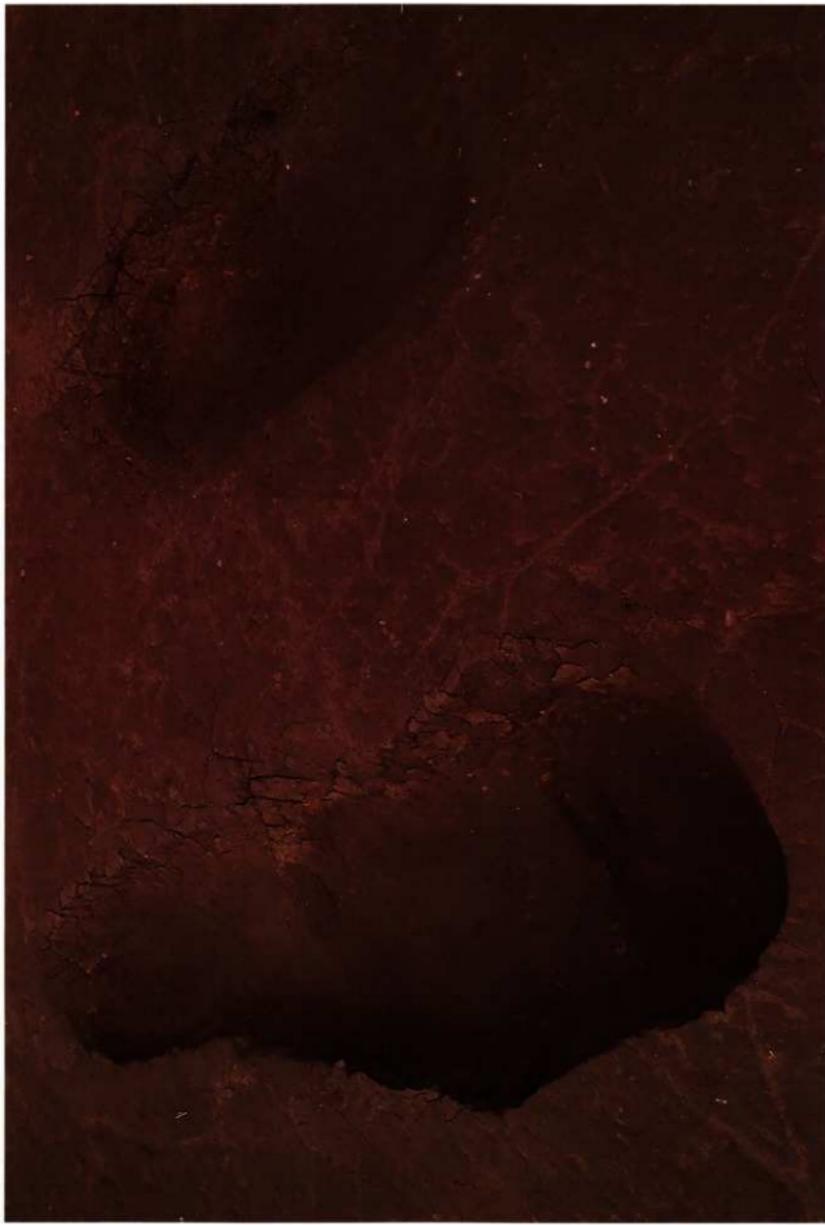
(12, 13) は石斧である。(12)は砂岩製の石材に成形を行ったのち研磨し形状を整えると共に刃部を製作する。末端部の折損は意図的かどうかは判別しがたい。(13)はチャート製であり、入念に磨かれている。チャートを用いた石斧は、昨年度行われた隣接地にあるE地区でも多量に出土しており、関連性が考えられる。

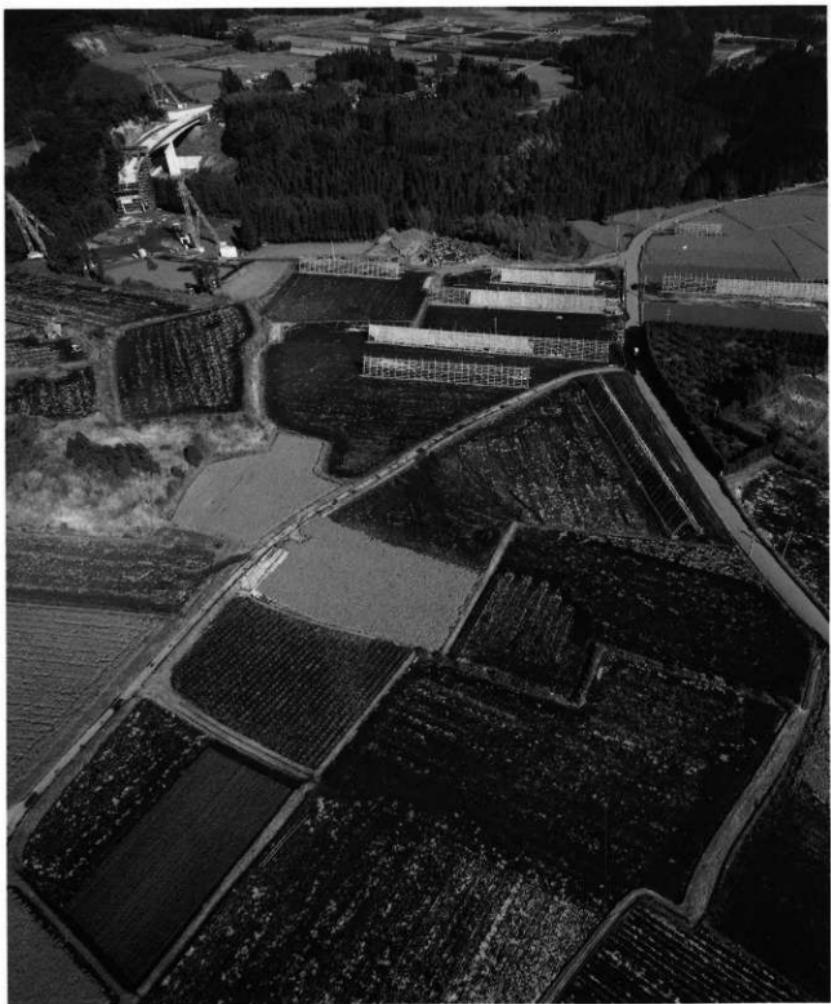
(14) は、長円形で扁平なホルンフェルスの礫の末端部に、小規模な剥離を施した上に、平坦部も含め磨きによる成形を行ったものである。裏面末端部には擦痕が残されるが、これが製作中の磨きによるものか、使用の際の痕跡なのかは定かでない。用途としては、調整を加えた末端部を刃部とし、斧として使用された可能性が考えられる。



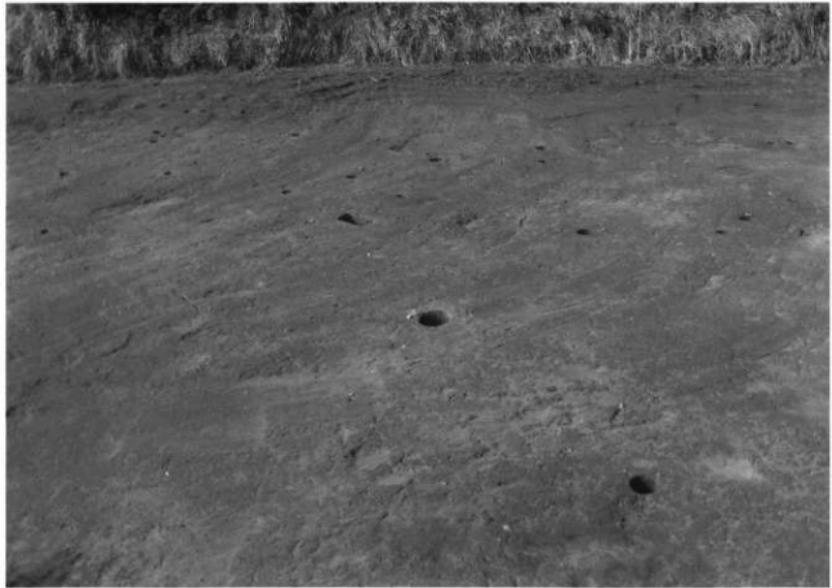
第8図 出土石器実測図

图版 1 土坑检出状况





図版2 調査着手前遠景



図版3 時期不明ピット群検出状況



図版4 縄文時代早期砾群検出状況



図版5 集石遺構検出状況



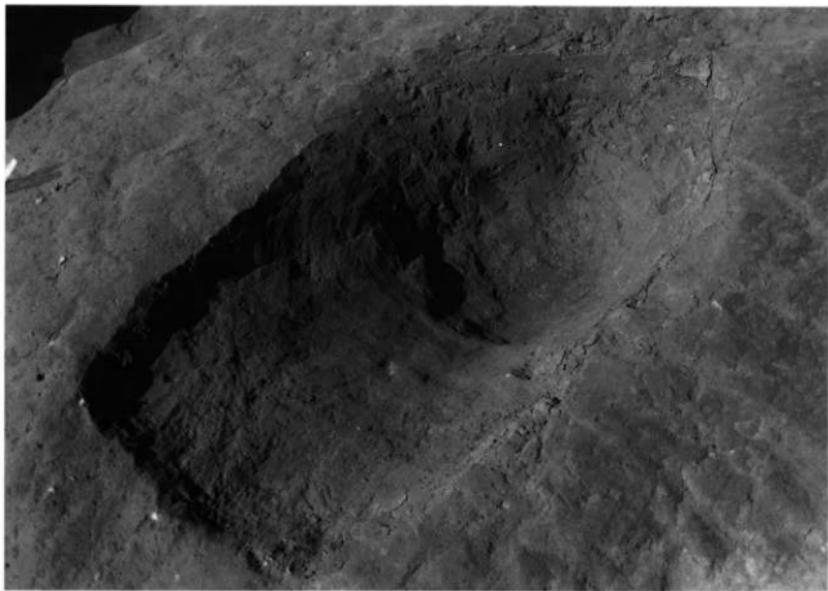
図版6 旧石器時代遺物出土状況



図版 7 S I -05検出状況



図版 8 S I -05内敷石検出状況



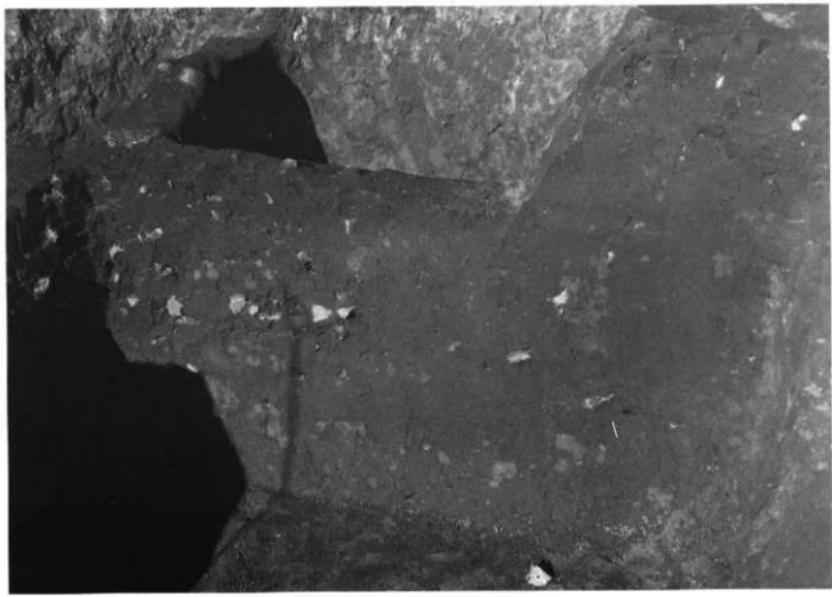
図版9 SC-01土坑検出状況



図版10 SC-02土坑検出状況



図版11 大型土坑検出状況



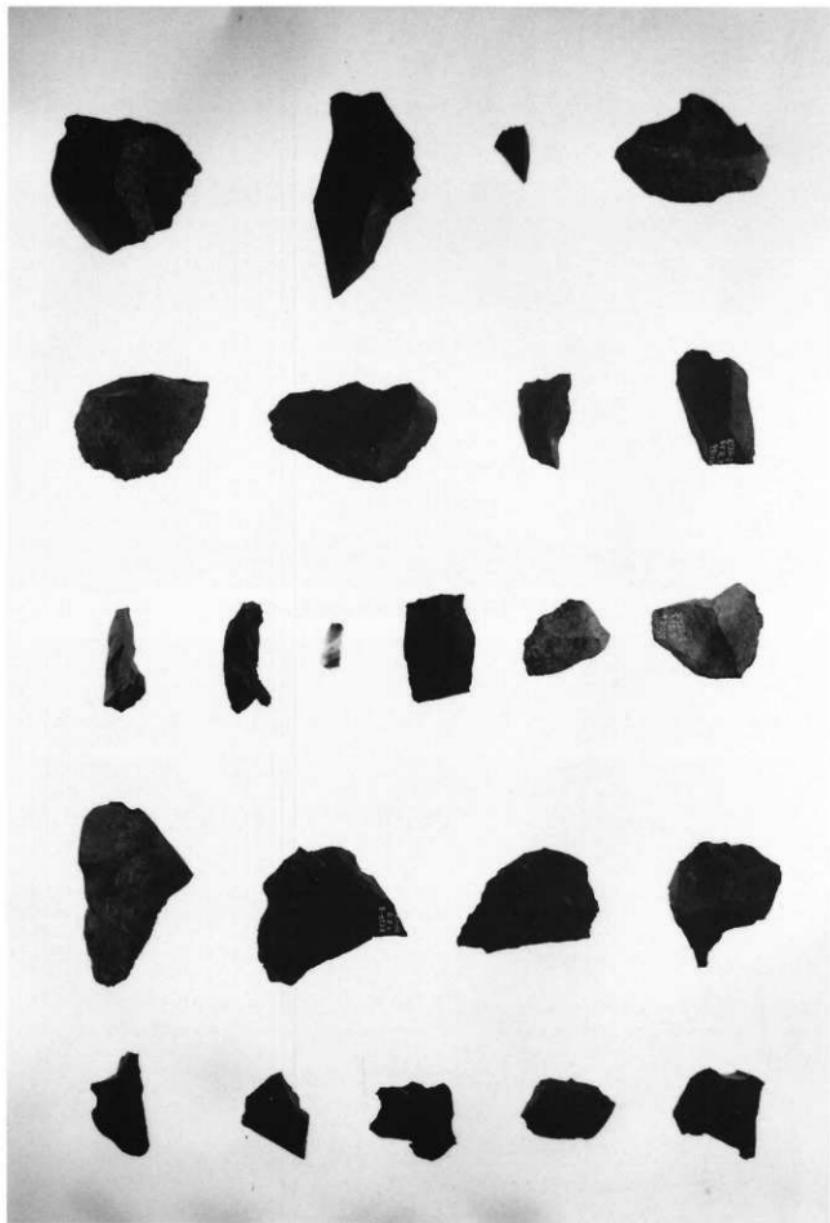
図版12 大型土坑土層堆積状況



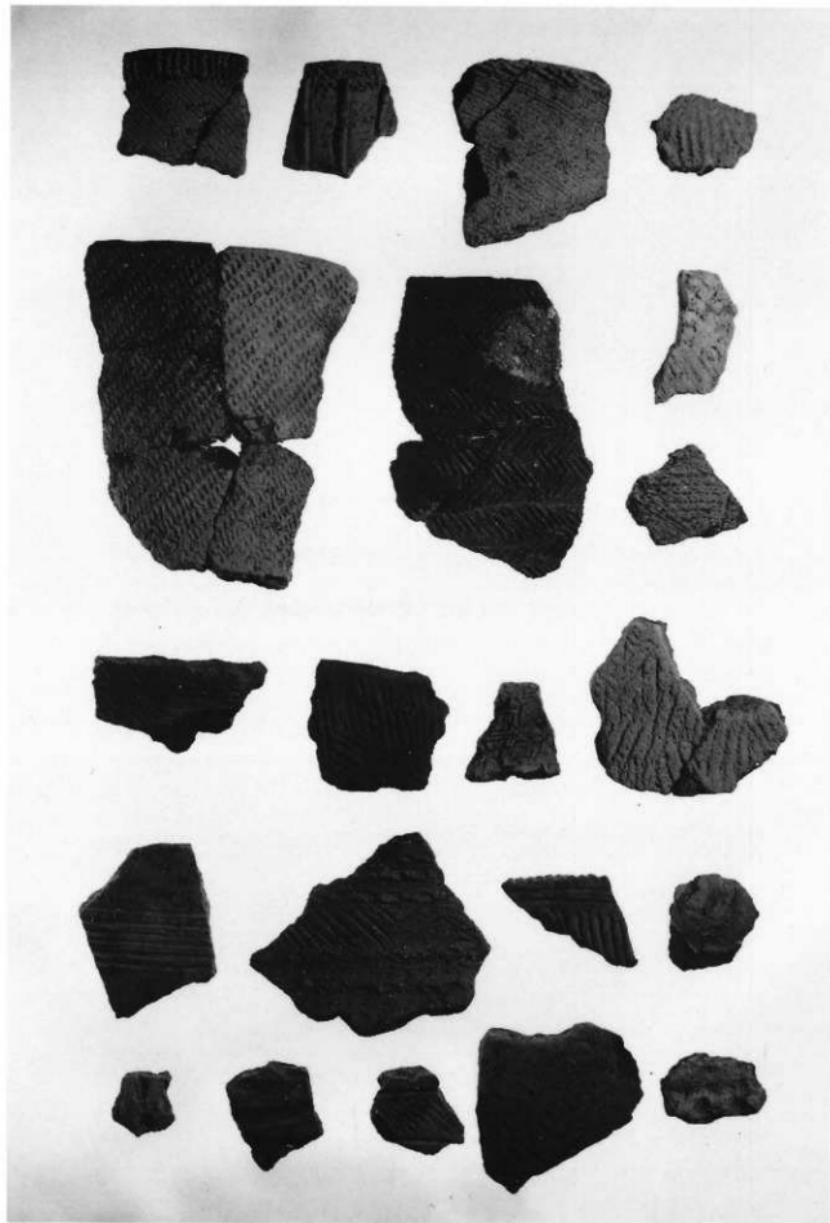
図版13 調査区完掘状況（b 区）



図版14 調査区完掘状況（c 区）



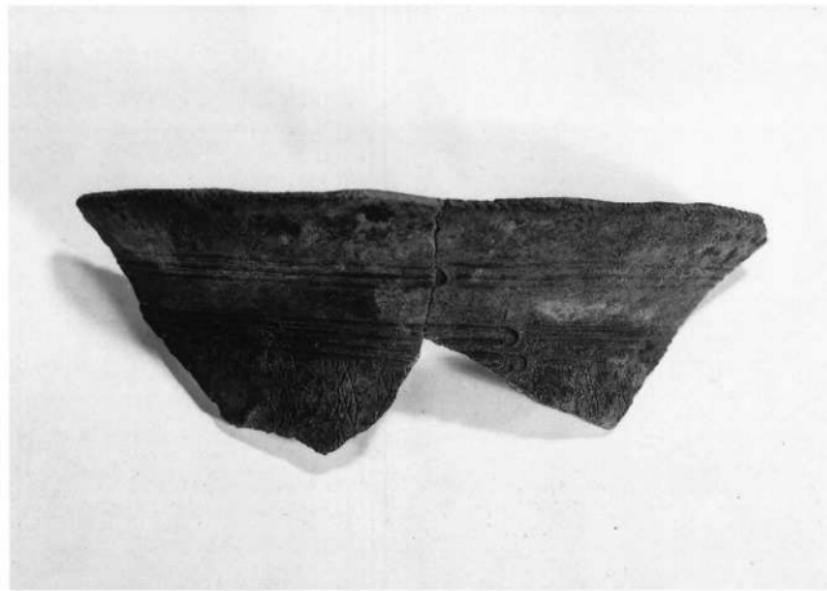
図版15 出土遺物（旧石器時代の石器）



図版16 出土遺物（縄文時代の土器 1）



図版17 出土遺物（縄文時代の土器 2）



図版18 出土遺物（縄文時代の土器 3）

報告書抄録

ふりがな	ずくのやまだいいせきちく		
書名	ズクノ山第2遺跡F地区		
副書名	平成11年度県営緊急畠地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書		
シリーズ名	田野町文化財調査報告書		
シリーズ番号	第32集		
編集者名	田野町教育委員会 文化財調査事務所 金丸武司		
編集機関	田野町教育委員会		
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地		
発行年月日	2000年3月		
ふりがな	ずくのやまだいいせきちく		
所収遺跡名	ズクノ山第2遺跡F地区		
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんのちょうおつうえのはら（かむらの）		
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡田野町乙字上ノ原13308-1外（鹿村野）		
調査期間	平成11年8月17日～12月23日		
調査面積	約8,200m ²		
調査原因	平成11年度県営緊急畠地帯総合整備事業鹿村野地区		
主な時代	旧石器時代～縄文時代早期、前期、中期、後期		
主な遺構	土坑、集石遺構	主な遺物	旧石器、縄文土器、縄文石器

田野町文化財調査報告書 第32集
ズクノ山第2遺跡F地区(概要報告書)

発行年月 2000年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 愛文社印刷所